

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

片岡真実 森美術館館長

Mami Kataoka / Director, Mori Art Museum



CREATOR^{No} INTERVIEW 121

片岡真実 Mami Kataoka

1965年愛知県生まれ。ニッセイ基礎研究所都市開発部研究員、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館。2020年1月1日館長就任。2007～2009年はハイワード・ギャラリー（ロンドン）にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ（2012年）共同芸術監督。第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）。CIMAM（国際美術館会議）会長、京都芸術大学大学院客員教授、東京芸術大学客員教授。文化庁アートプラットフォーム事業・日本現代アート委員会座長。AICA（美術評論家連盟）会員。その他、日本およびアジアの現代アートを中心に執筆・講演・審査等多数。

「初心者目」で街の魅力を見出す。



クリエイターインタビュー

『二者共存。世界各地のローカルをつなげ、発信する』

published_2020.10.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_tami okano

2003年森美術館の開館以来、同館のキュレーターとして活躍し、2020年1月、館長に就任した片岡真実さん。六本木とアートとの関係に当事者として携わってきた片岡さんは、街とアートの、美術館の未来をどう考えているのか。コロナ禍による5ヶ月間の休館を経てスタートした『STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ』の会場で聞きました。

二者択一ではない、二者共存のバランス。

森美術館は開館以来、国際性と現代性を掲げて活動をしてきました。特に国際性については、初代館長のデヴィッド・エリオットが日本の美術館史上、初めての外国人館長でしたし、展覧会の企画なども国際的なアートコミュニティに向けて発信をしていたところがありました。その結果、インターナショナルなネットワークに強い美術館という認識を得るようになり、開館当初から今に至るまで、海外からの来館者が多い美術館でもあります。

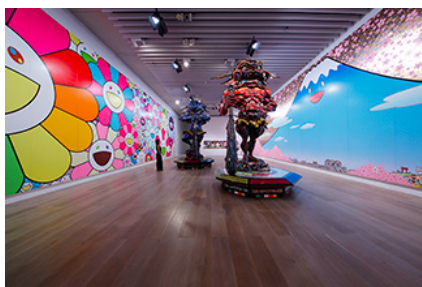
森美術館のいわば「強み」であるその国際性／グローバルな視点と、対極にあると思われる地域性／ローカルな視点を、どのようにつなげたらいいのか。国際性を考えるにあたり、ここ5年ほど、より強く意識するようになったのは、地域との関係です。というのもグローバルとローカルは、相反する方向性ではなく、地域の活動を通してこそ、国際性も模索できるのではないかと考えているんですね。対極にあると思われる概念や方向性が、同時に存在し得る方法は必ずあるはずで、これからの美術館の在り方としても、二者択一ではない、二者共存のバランスを考えていきたいと思っています。

現代性についても、単に「今」だけを見るのではなく、「過去」を見てこそ、浮かびあがってくるもの。自分たちの立ち位置を長い歴史の中で、時には人類史、地球の歴史といった、長い長い時間軸の中できちんと考え、今を見据えていきたいと思っています。

専門性と大衆性。スターがスターであるゆえん。

7月から始まった『STARS展』は、もともと、東京オリンピック・パラリンピックの開催を視野に入れた企画でした。海外からの訪問者が日本に来て、何をみたいのか。もしくは何を見せたいのかを考えた結果、世界が認める現代アートのトップランナー、6名の初期作品と最新作をつないで見せる展覧会となりました。この6名は海外でも大変評価が高く、「彼らの作品は日本のどこに行けば見られるのか」と聞かれることが多い方々です。にも関わらず、たとえば、李禹煥さんの作品が常設されているのは香川県の直島だったり、作品が東京では常設で見られない、というアーティストもいます。私としては、この『STARS展』に並んでいような作品が、東京のどこかに常設されていて欲しいと思っていて、そんな展覧会をつくりたい、と思ったのが始まりでもあります。

『STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ』は今後の森美術館の性格づけとしても、大きな意味をもつものだと考えています。なぜなら、これも二者共存の考え方で、「専門性」と「大衆性」の両方を内包する美術館でありたいと思っているからです。現代アートに馴染みのない人たちに開かれていながら、専門家、もしくはわりとアートをよく知っている人たちが見ても、新たな発見やうなずきがある展示を行っていききたい。そこで今回大事に考えたのは、スターをスターとして見せるということではなく、彼らがどのようにしてスターになっていったのか。その軌跡を見せていくことでした。ごく普通の若者が、日本を起点にどこから、どう歩いていったのか。それが伝わると面白いし、その軌跡は、これからスターになる人たちにも可能性を感じてもらえるものになるのではないかと。



『STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ』

世界から高い評価と注目を集めるスター作家6名（草間彌生、李禹煥、宮島達男、村上隆、奈良美智、杉本博司）が一堂に集う展覧会。各作家の初期作と最新作を展示し、その活動の軌跡を紹介する。2021年1月3日（日）まで開催予定。

展示風景：「STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ」森美術館（東京）2020年

撮影：高山幸三

画像提供：森美術館

もうひとつの特徴は、アーカイブのコーナーを設けたことです。1950年代以降、日本の現代アートが、海外でどのように紹介され、実際にはどう受け取られてきたのかがまとめて見られるようになってきました。世界の中での日本の政治的、経済的な位置づけも変わってきていますし、非欧米圏の美術の捉えられ方も変わってきているので、それらをより広い視野で見つめることで、6人のアーティストへの理解も、より深まると思います。アート初心者の方は作品だけを見ても楽しんでいただけたらと思うのですが、このアーカイブを、わりとみなさん熱心に見てくださっているのが嬉しいですね。



アーカイブ展示

出展作家6名の主要な展覧会歴、カタログ、展示風景写真、展覧会評などの資料を集めた「アーティストの活動歴」、1950年代から現在まで、海外で開催された日本の現代美術展50展を選出しその受容の歴史を探る「日本の現代美術展50展」で構成されたコーナー。

人間の精神を支える、リアルな鑑賞体験の価値。

新型コロナウイルスの影響で、森美術館も2月末から休館となり、『STARS展』は、美術館再開第一弾の企画展になりました。5ヶ月ぶりの再開が、この強烈な6人の展覧会で良かったと思っています。コロナ禍で世界中の美術館がオンラインプログラムに挑戦をしましたが、オンラインでの体験の限界が見えてきての再開のタイミングでしたし、「リアルな体験」の力強さが、6人の作品だからこそ、よりストレートに伝わったと思います。

アートは目でのみ鑑賞するものと思われがちですが、実際には視覚だけではなく、からだ全体で感じるものです。奈良美智さんの展示室で聞こえる「音」もそうですし、作品のスケール感や、時には嗅覚や触覚など、五感で感じるもの。その五感を使っての体験が人間の精神に与える力は大きい。アートは、不要不急なものではなく、衣食住という生活に必要なインフラとは別に、人間の精神をきちんと維持していくために必要なものです。そういった「リアルな体験」の素晴らしさは、美術館という場を持っている者として、今後も強調していくべきだと思っていますが、一方で、一歩進んだ形でのデジタルの可能性もまた、改めて感じているところです。それは、リアルと同じ体験をデジタルに求めるのではなく、リアルとデジタルのお互いの得意分野を上手く連携させていくような活動です。

『STARS展』では、各作家についてのイントロダクションのテキストをウェブサイトにも掲載しています。通例より長い文章で、作家についての予習や復習ができるようになってきました。最近は展示の解説も長いものが多く、その場で簡単には読めないこともあると思うのですが、それをオンラインに移行していくというのも、今後考えられる方法かなと思います。長い映像作品についてもしかりです。また、リアルな体験をした後に、ギャラリートークなどをウェブで見ていただくと、その作品への理解がより深まったりもします。デジタルとうまく連携することで、展覧会の鑑賞がリアルな世界だけに終わることなく、さらに意味が付加される形で広がっていく可能性は無限にある、と思います。



片岡真実 森美術館館長

MAMI KATAOKA / Director, Mori Art Museum

published_2020.10.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_tami okano

現代アートは人生をどう生きるかのプラクティス。

芸術的な体験というのは、フィジカルな体験、もしくは感情に訴えるようなエモーショナルな体験が重要だと思うのですが、もうひとつは、今回のアーカイブの展示にあるように、その歴史を知識として学んでいくことも、非常に重要なことだと思っています。フィジカルな体験と知的な体験、つまり、「体験とストーリー」の両方が必要なんですね。そのふたつが備わったとき、アートというのは、生きていく上での本当に大きな力になります。

現代アートは難しくて「分からない」というのが常套句です。でも、その分からなさ、もしくは不確定なものの中に、どういう方向性を見出していくのかを考えることは、見る人それぞれに与えられているプラクティスなんだと思います。さまざまな考え方があり、さまざまなアイデアがある中で、自分は何を選ぶのか。そのことに向き合うというのは、我々みんなに課せられた「人生をどう生きるのか」という問いに向き合うことでもあります。

これからの時代、言われたことをやればいい、というスタンスは通用しません。会社の中でも、これまでのルールはこうだったから、とか、上司にそう言われたから、とか、それだけを追っついては、何も成し得ません。本当にそうなのか、という問いを常にもちながら、自分の頭で考えていかなければならない。そういう意味でも、現代アートの体験、ストーリーからの学びというものは、さまざまな問いに向き合い、その時々でベストな方向性を編み出していく「頭の訓練」に極めて大きな役割を果たせるんじゃないかなと思います。

地域のモダニズムを基盤に、次に何ができるかを考える。

現代アートは、ここ30年ほどの間で大きく方向性の舵を切り、変わってきています。まずあげられるのが、西洋中心だった美術の歴史や在り方が、世界の多様な地域に拡大していったこと。それは政治でも経済でも同じですが、アートにおいても、その大きな流れの中で、それぞれの国や地域の人たちが、自分たちの文脈が何であるのか、その文脈が世界の動向とどのように比較検討できるのか。相対化できるのか。そういうものの見方が必要になってきましたし、今後もそれはさらに重要になっていくでしょう。

たとえば、村上隆さんは、西洋が牽引してきた現代アートに対して挑戦を挑むという、明らかな戦略を展開してきたアーティストです。だからこそ、世界であれほどまで大きな評価を得ることができました。日本のアーティストは、その軌跡に学びつつ、これからは、それぞれの地域で発展してきたモダニズムという基盤の上に立ち、次に何ができるのかを考えていく必要がある。

日本は、社会や経済の近代化という意味では欧米と近いところにありながら、地理的にはアジア太平洋に位置しています。その両義的な立ち位置をどう活かしていくのか。これからの日本のアーティストは「アジア太平洋地域の美術の発展」とどのような協力関係を築いていけるかが、おそらく非常に重要な課題になると思います。

日本のアーティストはどちらかというと、社会的、政治的な視点が希薄であると言われていています。もちろん、そういった視点だけが現代アートではありませんが、大きく世界を見つつ、その中での日本の歴史や立ち位置を理解した上で、次の一手を探していく人が増えてくればと個人的には願っています。

世界は、あらゆるローカルでできている。

2011年に起きた3.11から来年で10年になります。あの震災以降、アートの役割のひとつとして「地域コミュニティにどう貢献できるのか」という意識が、急速に高まりました。日本全国の地方都市で行われている芸術祭でもローカルに根ざした作品が多くなりましたし、その意識は広く浸透し始めていると感じています。ただ、浸透する一方で、そのことが世界とどう連動しているのかが、見えにくくなっているということも。作品が世界を向くのか、あるいは地域を向くのか、という二者択一ではなく、地域のことをきちんと見つめながら、かつ、世界ともきちんと結ばれているという在り方を、もっと考えていかなければならない。

世界と地域とは、世界が上のほうにある凄いもので、地域が下のほうにある、という関係ではありません。世界というのは、あらゆるローカルでできているんですよね。なので、ローカルコミュニティ同士が国際的につながる、ということは全然可能なことで、世界の各地域で非常に興味深い試みをしているアーティストもたくさんいます。そういう人たちを呼んで、六本木に来てもらうという機会も、ぜひ増やしていきたいですね。たとえば、メキシコのある村でやっている活動を、日本の、東京の、六本木という都市の文脈に置いた時に、どう活かせるのか、あるいは、六本木の側から見た時に、メキシコのローカルで行われてきたことを自分たちの文脈に置き換えたなら何ができるのか。そのやりとりからお互いが学ぶことはたくさんあると思いますし、そこから未来が見えてくるのではないかと思います。



片岡真実 森美術館館長

MAMI KATAOKA / Director, Mori Art Museum

published_2020.10.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_tami okano

「初心者の目」で六本木の魅力を発掘・発信していく。

六本木をアートの舞台として見ていくと、「六本木アートナイト」が果たしてきた役割は大きいですね。10年間続けてきたことによって、アート関係者にもアートに関心のあるビジターにも定着したと言えるでしょう。ただ、定着した途端に定型化していく、という時期に入りつつあるのかなと思っていて、その定型化が、気になるところです。長年続けていると、どうしても出来上がった「型」を継承するだけで、なぜやるのかを問わなくなってしまう。本当はその「問い直し」を毎回やるべきだし、今年はコロナの問題で例年通りには開催できないと思いますので、これもひとつの機会として、今後に向けた問い直しを私自身、行いたいなと思っています。



六本木アートナイト

2009年より続く六本木のアートの祭典。街をひとつの美術館に見立て、一夜限りの展示やプログラムを実施。「生活の中でアートを楽しむ」新しいライフスタイルを提案する。片岡さんは、2020年度実行委員長を務める(2020年度の開催は、新型コロナウイルスの影響により2021年へ延期)。

これは個人的な意見ですけど、今後やってみたいのは期間を長くするとか、地域をもう少し拡大してみるとか。実際、アート展示も数が増えているので、ひと晩じゃとても回りきれない。たとえば、1ヶ月くらい期間を延ばし、最後だけオールナイトのお祭りがある、みたいなことができればいいのですが……。

六本木という「街」の再発見を、アートナイトでもう少し力を入れてやってもいいと思います。先ほどお話をしたように、世界各地でローカルな活動をしている人たちが六本木ローカルとつなげ、六本木から発信してもらうのもいいでしょう。2017年に『サンシャワー：東南アジアの現代美術展』を開催した際も、「六本木アートナイト」との連動企画で、参加アーティストのナウィン・ラワンチャイクンに映画をつくってもらったことがあります。彼はタイ人なのですが、ローカルな人たちと仕事をするのがとても上手で、そういった外の人の目から、六本木の魅力を発掘・発信していくことも、まだまだできるのではないかと思います。



『サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで』

2017年、森美術館と国立新美術館にて同時開催された展覧会。東南アジアにフォーカスを当て、1980年代以降の現代アートを紹介。両館にて86名/組の東南アジアのアーティストが参加し、大きな変化を遂げる東南アジア地域の姿を、その歴史的背景とともに伝えた。



ナウィン・ラワンチャイクン《OKのまつり（六本木物語）》2017年

タイのアーティスト、ナウィン・ラワンチャイクンが、六本木・西公園にて「祭り」を開催。六本木の人々の日常を収めた短編ドキュメンタリー《OKのまつり（六本木物語）ドキュメンタリー》の上映、ダンスパフォーマンス、ワークショップなどが行われた。

ナウィン・ラワンチャイクン《OKのまつり（六本木物語）》2017年

アクリル絵具、キャンバス 170×450 cm

外の目、ってやっぱり大事ですよ。日本の現代アートもそうですし、日本文化もブルーノ・タウトが桂離宮を紹介したように、いろんな人が外から見て、その魅力を再発見してきたところがある。六本木という街も、そこにいる人たちは住めば住むほど慣れてしまうので、何が特別なのかということ「初心者目」で見えていくことは、繰り返し必要なのかなと思います。

片岡真実 森美術館館長

MAMI KATAOKA / Director, Mori Art Museum



published_2020.10.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_tami okano

リアルとデジタルと、街も舞台にした複層的なアートの舞台。

街の魅力を再発見する、という意味では、かつて、街そのものをアートの舞台にした事例もありました。1986年にベルギーのアントワープという街で行われた『シャンブル・ダミ (Chambre d'Amis)』という展覧会です。シャンブル・ダミとは、「友だちの家」という意味で、アーティストを市内50カ所以上の一般住宅に送り込み、家そのものを展示会場にしたんです。観客は、その一般住宅をめぐるという画期的な試みで、キュレーションは、のちにアントワープの現代美術館の館長にもなるヤン・フート氏。展覧会の歴史の中でも非常に重要なプロジェクトとして知られています。

さすがに現代の六本木では、知らない人が自分の家の中に入ってくる、っていうのは難しいと思いますが、有名な美術館やよく知られている公共施設ではなく、一般の人があまり行ったことがないようなビルや民家の庭などにアートがある、というのは、面白いですよね。そうやって街に点在させたアートをめぐること、長く六本木に住んでいる人たちや六本木の歴史に触れることもできる。まあ、これは本当に、さまざまな安全性や実現性を度外視した完全なる個人的な夢ですが……。

現代美術館がない街において、街そのものを使ってアートの展示をしていくというのは世界各地で行われてきた手法でもあります。その後、現代美術館ができると、アートの活動がすべて美術館の中に集約されていってしまうので、それはそれで、よかったのかどうか、判断は難しい面もあります。アートが建物の中だけで完結するものではないことは、私たち森美術館としても考えるところがある話で、ハードとしての森美術館だけではなく、できれば、街の中にも、森美術館というコンセプトが浸透してほしいと思っていますし、リアルな美術館の空間と、デジタル空間と、そして街の中もアートの舞台なんだ、とみんなが考えられると、だいぶ活動が複層的になり、可能性が広がるのではないのでしょうか。

取材を終えて

『STARS展』の見所をお聞きすると、アーカイブコーナーについての思いをひとときわ熱く語ってくれた片岡さん。1950年代以降の展覧会史を学ぶことも、アートをより深く理解し、楽しむ方法のひとつ、と教えてくれました。インタビュー中、個人的に集めている古い展覧会のカタログを館長室から持ってきて見せてくれる場面も。力強いリーダーシップの持ち主という印象と同時に、現代アートの研究者のような一面ものぞかせてくれました。(text_tami okano)